放眼日中

歴史を学ぶということ

長年勤めた会社を辞める直前、思い立ってカンボジアへ行った。アンコールワットの壮大な遺跡を目の前にして、これまでのことがすべて小さく見えてしまい、ある意味で退職の引き金となった、思い出の地である。また、カンボジアの人々の生きざまを見ていると、人間はいかようにも生きていけるものだと感じられ、勇気付けられた場所でもある。

特に印象に残ったのが、ポル・ポト政権下のカンボジアで大量虐殺が行われた刑場跡、いわゆるキリングフィールド。プノンペンで見た刑場跡とトゥールスレン（政治犯収容所S21）の凄惨さには心が痛んだ。このようなことがほんの40年前に実際に起こったのかと、目を疑いたくなる光景だった。

そこには大勢の観光客が来ていたが、よく見ればほとんど欧米人で、日本人は数えるほどしかいなかった。そのことをガイドに言うと「とても残念ですが、日本人でプノンペンを初めて訪れる観光客のうち、キリングフィールドを訪れてくれる人は半分以下です」とのこと。それに対して欧米人は100％に近いのではないかというから、その差は大きいと感じた。映画ではあれほど話題になったのに、なぜ行こうとしないのだろうか。

帰国後、数人にこの話をすると「旅行は楽しくないと意味がないので、そういう場所には行きたくない」という声があり、ちょっと驚いた。そう、日本人と欧米人の旅のスタイルの一番の違いと言えば「旅を楽しむ」だけか、「旅から何かを学ぶ」か、ではないかと最近強く思っている。しかも、日本人にありがちな、暗記物としての歴史ではなく、自ら考え、参考にする歴史の勉強が足りていないように思えてならない。

先日ベトナムへ行った際も同じ思いをした。ハノイのホアロー収容所を見学したが、やはり大多数は欧米人で、特に若い中高生が熱心に資料を見て、写真を撮り、何かを考えている様子がとても印象的だった。残念ながら日本人はほとんどおらず、中国人の団体観光客は、ぐるぐる回っただけで「暑い暑い」と言って出て行ってしまった。

ただ、ここで出会ったベトナムの若者に「ベトナム人も歴史には興味がないんです。何しろ今を生きていくのが優先ですから」と説明されると、それはなるほどと思わざるを得ない。

何しろ、戦争に次ぐ戦争で過ごしてきたベトナム人。最近は共産党の独裁、経済発展の歪（ゆが）み、隣国の圧力とも戦っており、過去を振り返る余裕などないということだろう。

最近、お茶の歴史の勉強を重ねているが「そんなことをして何になるのか」という質問を受けることがある。確かに、すぐに儲（もう）けに結び付く話でもないが、自らが飲むお茶の歴史的な背景が分かった方が面白いのではないかと答えている。

ただ、お茶の世界で、その歴史が持ち出される時は「歴史や文化を強調した方が、茶葉の販売がしやすいから」などと、商業上の理由である場合が多い。

特に、近年の中国においては利益と結び付いた歴史が語られていると強く感じる。歴史を学ぶことの意味とは何だろうか。歴史とは実は現在なのであり、政治でもあるのだ。もう少しその辺を深く考えるべきではないかとふと思う。

コラムニスト・アジアンウオッチャー
須賀　努

すが・つとむ　東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。